安楽寺だより

第47号

紙面内容

２面　定例法話を勤める・荒山　信師
３面　東別院で二回目の法話・若院
４面　日本仏教史(補足)　蓮如上人３

編集・発行　安楽寺住職　吉田　和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話　〇五二（八四一）二六〇六

第６回「仏陀となられる」

沙門シッダールタの苦行は、身体的苦行とともに孤独に耐える生活を続け、欲望が働くことを抑える修行でもありました。シッダールタは、苦行を続けることにより自身のこころが澄み、自分のなかにある「悪しき想い」を抑制して、欲望に煩わされることのない修行生活を過ごされたと言えます。

お釈迦さまは、後年次のように回顧されています。『この難行によっても、わたくしは人間のレベルを超えた特別の優れた聖なる洞察を得ることができなかった。なぜなら、聖なる智慧が達せられていなかったからである。聖なる智慧が得られたならば、それは解脱に導くものであり、それにしたがって行ずる人の苦しみを正しく滅するためのものなのである』（中部経典より）

六年間の苦行修行を止められたシッダールタは、セーナ村の村長の娘・スジャータから乳粥を献ぜられて、こころと身体の力を回復しました。そして、体を清めてネーランジャー河を西に渡り、ガヤーの町の郊外にあるヒッパラ樹（のちに菩提樹と呼ばれる）のもとに草を敷いて坐して、瞑想に専念されました。

その後、シッダールタが心理に目覚めるまでの間に、様々の悪魔がやってきて屈服させようとしました。それは、人間のこころの内にある迷いのこころ（欲界の支配者―煩悩）が、かわるがわる誘惑して止めさせようとしました。

「悪魔」とは自分自身のこころの中にいる

つまり悪魔とは、私たちの外側に存在しているものではなく、自分自身のこころの中に潜んでいるのです。さまざまな問題の本質とその解決を自分の内側に求めていくことを「内観」といいます。そしてこの内観によって初めて、人間は苦悩の本質を知って、真に自由になることが出来るのです。

沙門シッダールタは、ついに悪魔たちを降服させ、悟りの時が静かに訪れました。沙門シッダールタは仏陀（ブッダ）となられたのです。二十九歳で出家されてから六年余りの月日が流れました。

仏典では、『降魔成道』と呼ばれています。日本では十二月八日がお釈迦様の成道の日とされています。

定例法話勤める

六月十三日、定例法話をお勤めいたしました。初めてご参加のご門徒さまもあり、九名の皆様にお参りいただきました。今年も荒山信師（昭和区・恵林寺住職）にご法話をしていただきました。

『弥陀の本願信ずべし　本願信ずるひとはみな　摂取不捨の利益にて　無上覚をばさとるなり』このご和讃は、親鸞聖人が八十五歳の時、夢で聖徳太子の声を聞いて、お述べになったご和讃です。

『摂取不捨の利益』とは、どんな人でも決して見捨てないという阿弥陀さまのご本願の教えです。ほとけさまの前に立ち止まり、ほとけさまの教えを聞くと自分自身の生き方を見つめなおす生活が始まります。

日頃は気づかないわたしが、いただいているいのちの意味を確かめさせていただくことができるのです。忙しい忙しいと日暮ししているわたしですが、「何のために生きているのか？という問いを持つことが大事ですよ」と教えて下さっていると思います。

聖徳太子は、世間に居ながら仏法をよりどころとして生きられた方です。有名な十七条の憲法で「篤く（仏法僧の）三宝を敬え」また「みなこれ凡夫　ならくの身」

「人のこころは水のようなもの」

（凡夫は、縁によって生きる身であります）と申しておられます。人間は条件によって生きています。たとえば、人間は腹の立つ条件が整えば腹を立てます。人のこころは水のようなものです。器によってどんな形にもなります。人のこころはコントロールできません。

四年前に亡くなった父（荒山修師）は、「聞法とは、自分のあり様を言い当てて下さるほとけさまの教えに出遇うこと」と申しておりました。

正信偈に『一切善悪凡夫人』とありますが、善悪にしばられているのが凡夫です。良い悪いという価値判断によって、自分を苦しめ生き方を狭くしています。作家の大江健三郎さんは「正しさは暴走する」と小説で申されています。自分は間違っていない、人の話しを聞こうとしないことです。ロシアのプーチン大統領は、立ち止まることがない、自分は正しい、人の話しを聞かないとの独善が多くの人びとを苦しめているのだと思います。唯、他人のことはわかるが、自分のことはわからないのがわたしです。無明の身だからこそ、繰り返しほとけさまの前に立ち止まり、教えを聞かせていただきたいと思います。

東別院で定例法話

若院　吉田昌史

ことばに出遇う

四月十五日に名古屋東別院に於いて、定例法話をさせていただきました。昨年と同じ月日に二回目の定例法話の座をいただきました。今回は「ことばに出遇う」という講題を掲げ、お話させていただきました。

私たちは、人として生まれて「ことば」とは切っても切れない人生を歩ませてもらっています。言うなれば「当たり前」のように使っている言葉もあります。しかし、その言葉一つ一つ取ると、自分から生まれたものではなく、両親やおじいちゃん、おばあちゃん、沢山の縁をもらった人たちに教えていただいた言葉であると気付かされます

「もっぱら称名たゆることなし」

対面所で２回目の法話

親鸞聖人が法然上人との出遇いによって、お浄土の教えを歩み始められました。このお言葉は、親鸞聖人の生涯を描かれた『御伝鈔』に書かれています。「称名」とは『南無阿弥陀仏』であります。法然上人からいただいた「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」というお言葉を、生涯通して出遇い続けられたからこそ、自分の死期が差し迫っている時でも『南無阿弥陀仏』の名号を称えられていたのだと思います。

今の私自身なかなかそのように思うことができずにおりますが、『南無阿弥陀仏』とはいったいどういう言葉なのか」「阿弥陀様はどのように願ってくださっているのだろうか」日々考えながら生きていくことで、親鸞聖人が歩まれた道に少しでも近づけるのではないかと信じております。

皆様も沢山の「ことば」に出遇われていると思います。そのいただいた言葉をぜひ考えてみて下さい。それは答えを出すことではありません。出遇い続けることと、問い続けることによって大切なものが必ず見えてくるものだと私は思っております。

ご聴聞いただいた皆様、誠に有難うございました。

仏教豆知識

第四十七回

日本仏教史

補足　蓮如上人３

⑤　御文による布教

前号（第四十六号）の御文の続きです

されば このうえには、たとい名号を称えるとも仏たすけたまえと、思うべからず。ただ弥陀をたのむこころの一念の信心によりて、やすく御たすけあることのかたじけなさのあまり、弥陀如来の御たすけありたる御恩を報じたてまつる念仏なり、とこころうべきなり。これまこと の専修専念の行者なり。これまた当流にたつるところの一念発起平生業成ともうすもこのこころなり。あなかしこあなかしこ

蓮如上人のご教化によって本願寺教団は、近江の国（現在の滋賀県）一体で勢力を拡げました。それまでは、仏光寺をはじめ真宗諸派が隆盛していました。上人の御文によって親鸞聖人のおしえを民衆が理解し得る道が開けて、布教の効果が表われていきました。

⑥　本願寺の破却

そのことは、山門延暦寺を刺激せずにはおきませんでした。寛正六年（一四六五年）に山門衆徒による大谷本願寺への攻撃が起こりました。蓮如上人はかろうじて難をのがれ、身一つで大津に居を移されました。

しかし、京都周辺で本願寺勢力が伸びる限り、再度の弾圧の危機は続きました。上人は近江の三井寺に親鸞聖人の祖像の安置を願い出て、一応収まりました。

二〇二三年に本山で厳修される親鸞聖人慶讃法要の別院お待ち受け大会ご案内

（期日）二〇二三年十月一日（土）　午後一時～四時

（会場）名古屋東別院本堂

（内容）おつとめと記念講演

同朋大学名誉教授　尾畑文正氏

詳細は、改めてご案内いたします

核兵器を非人道兵器として歴史上初めて違法とした核兵器禁止条約の第一回締約国会議が、六月二十一日にオーストリアで開催されました。国連加盟の約三分の一の国が批准し、その輪は拡がりを見せています。▼アジアのある国は、核による威嚇をしています。またある大国の戦争での核使用の脅しは、全く独善的言動であり、決して許されるものではありません。▼日本のある政治家は、「核の共有」なる発言をしています。これらは、武力紛争の危険を大きくさせるもので、平和憲法のもとで暮している私たち日本人には、到底受け入れがたいことです▼七十七年間苦難の人生を歩んでこられた広島・長崎などの被爆者の皆様が、「核は絶対悪」「核とは共存できない」と訴え続けておられる声に、私たちが真剣に向き合う時であるとおもいます。